

# ESD・ユネスコスクールの取組

## 気仙沼市ESD10年の事例を参考に



宮城教育大学  
見上一幸



### From Environmental Education to ESD

**Sustainability**

ゴールは同じ、  
“持続可能性”

間口が広すぎて  
わかりにくいESD



“持続可能な社会づくりのための担い手づくり”  
(ESD) がますます重要



⇒ ユネスコスクール・ネットワークの役割への期待

ユネスコスクールは、質の高い学校間ネットワーク：  
“まず国内の学校間交流を”

学校間の交流を通じて、相手の良さに気づき、  
自分たちの良さにも気づく機会



外国の学校との交流もさらに大きな発見や  
気づきに導くことが期待される

## 面瀬小学校の取組み

(特徴) 気仙沼市では、環境教育を基本に最も取組みが古い面瀬小学校に赴任した先生が宮城県内の各地に移動して、そこで再び活動が芽吹いている。(気仙沼市教委)

- 4年生まで：面瀬川周辺の水辺環境の変化と生き物のつながりを学習→水辺環境の保護で自分たちで行動
- 5年生で：「川の環境」から「海の環境」へ→震災後の気仙沼の水産業の現状と海の環境
- 6年生で：将来実現させたいまちづくり→震災後の気仙沼市の復興は、自分たちが担う意識
- 6年生： 単元名 「ひびけ！ぼくらの声」(70時間扱い)  
～みんなで考えよう「未来都市」気仙沼～
- 【ESDの構成概念】 相互性、有限性、責任性
- 【重視する能力・態度】 批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力、多面的・総合的に考える力(自然・文化・産業・経済等)
- 授業の流れの一部  
自然環境を守るために、同じ願いを持つ者がグループになり、課題を設定→調査活動→結果をまとめる→発表し合い、新たな課題の発見  
自分たちの理想のまちづくり→今日的なエネルギー問題も含める。→公開

## 実践上の留意点

- 言語活動を大切に
- (基礎として重要)

質問の大切さ(地方新聞社のサポート)

「書く」と「思考」のバランスが大切

書くことに重点を置くと、作品(報告書)づくりに夢中になりがちで、考えを深めることが難しくなる。

- 思考を深めるには、

- (1) 子どもどうしのディスカッションを行う。
- (2) 先生の助言:ファシリテーション能力が重要
- (3) 専門家、身近な助言者



4

## テーマ: 食を通して地域を見つめ持続可能な郷土の未来を描く児童の育成

「階上小学校スローフード宣言」 1~6年生までが「食」について課題を見つけ、地域とのかかわりながら、系統的に学習し、自分自身や地域の将来のあるべき姿を提言する力を育てる。 スローフードを10年以上継続

- 学習の中で児童に育てたい力

- ささまざまな国や地域の食品を通して、文化、自然、生産者、消費者などに関心を持ち、自らの課題を解決する
- 地元の食材と人を通じて、食文化や風土、環境に誇りを持つ
- 郷土の将来のあるべき姿について、自分の意見を持ち、行動

1・2年生 茶豆の収穫

3年生 地域の「川」を通じて、農業環境を調査、川の役割と農産物の関係を学ぶ

4年生 水田での体験学習を通じて、稲の生長や米の流通、暮らしを学習

5年生 地域の水産業に着目し、地元食材、産業、暮らし、環境のつながり

6年生 岩手県盛岡地方のスローフードと比較学習、気仙沼の食の魅力と未来に伝える取組み

5

## 第5学年 総合的な学習

単元名『豊かな海、気仙沼』

～見つめよう、考えよう、気仙沼の水産業～

### ・【問題を解決する力】

海とともに生きる気仙沼の人々の生活

### ・【主体的・創造的な学び方・態度】

人々の生活、水産業、食、自然に自らの課題発見、解決

### ・【自己の生き方を考える】

海とともに生きる人々の生活を理解、地域の一員としての誇り、あるべき将来

課題設定を重視

### ・全員が個人研究テーマ（男9名、女11名 計20名）

先生は個別に対応、給食を食べながらの熱心な指導も

「リアス式海岸の秘密」、「マグロはえなわ漁」、「気仙沼港祭りについて」、

「さめの秘密をさぐる」、「フカヒレについて」、「有毒な貝について」など



## 『ぼくらは未来の消防士』(防災教育)

総合的な学習の時間(全学年、各35時間)

- ・ 中学校でのESDは、教科別指導のため、教科横断が難しい。
- ・ 考えを実行に移し、地域貢献に生かす方向がよい。
- ・ 実際に消防士になった生徒もいる(女子も)
- ・ 単に総合学習の枠を越えて生き方につながる
- ・ 震災経験を学習に生かす

(成果)

1. 東日本大震災、発災直後の対応
2. 津波警報発令後の行動
3. 住民と協力しての初期消火
4. 卒業生の消防団入隊
5. 階上地区防災教育推進委員会の設立
6. 防災学習を全国へ発信

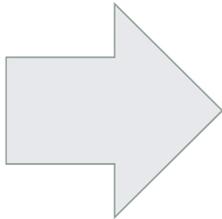
1学年…地震、津波のメカニズムを学習  
2学年…救命救急、AED、応急手当講習  
3学年…小学校への防災啓発活動



- 知識情報伝達の多量化 & 高速化、グローバル化の中で、

### ESDで求められる能力

- コミュニケーション能力  
国際標準語としての英語  
ICTリテラシーの重要性
- 実体験・経験、感性の育成の重要性
- 言語(母語)技術の向上と思考の深化
- 教科の力



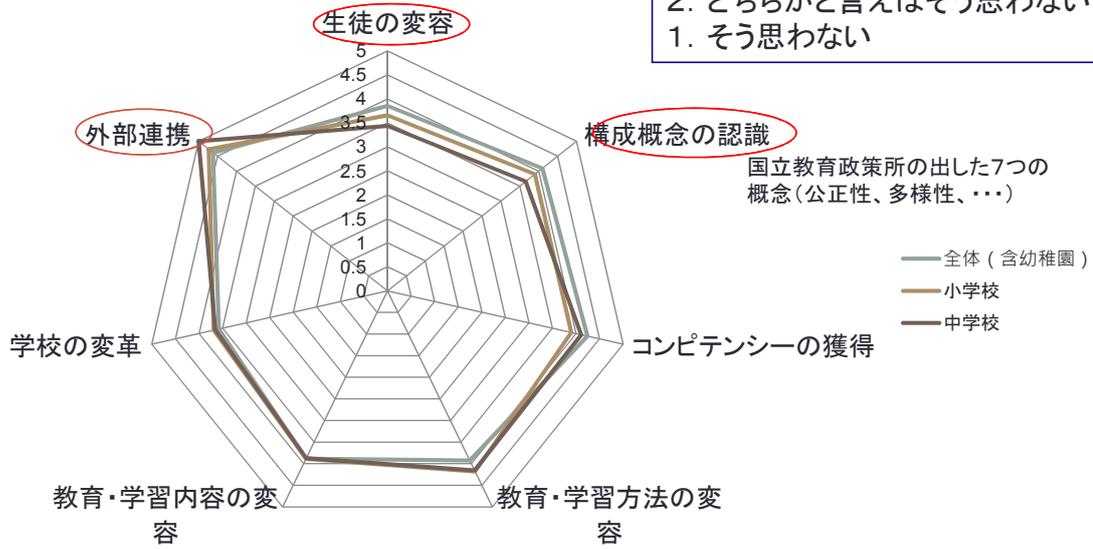
## 知識基盤社会における思考

### 持続発展教育(ESD)で培われる力 (生きる力の育成)

- コミュニケーション能力
- クリティカル・シンキング(批判的思考、あらゆる情報に対して批判的な思考を働かせて分析する習慣)
- システム・シンキング(システム思考、ものごとを考察する際に単に要素に還元するのではなく、“システム”という概念を用いて、対象全体を包括的にとらえる)
- ホリスティック・シンキング(包括的思考)
- デイジジョン・メイキング(意思決定、その時点で最善の判断を行うことができる能力)
- 実践力・実行力
- 感謝する心の醸成(気仙沼市白幡教育長)

1. 学校教育におけるESDの成果

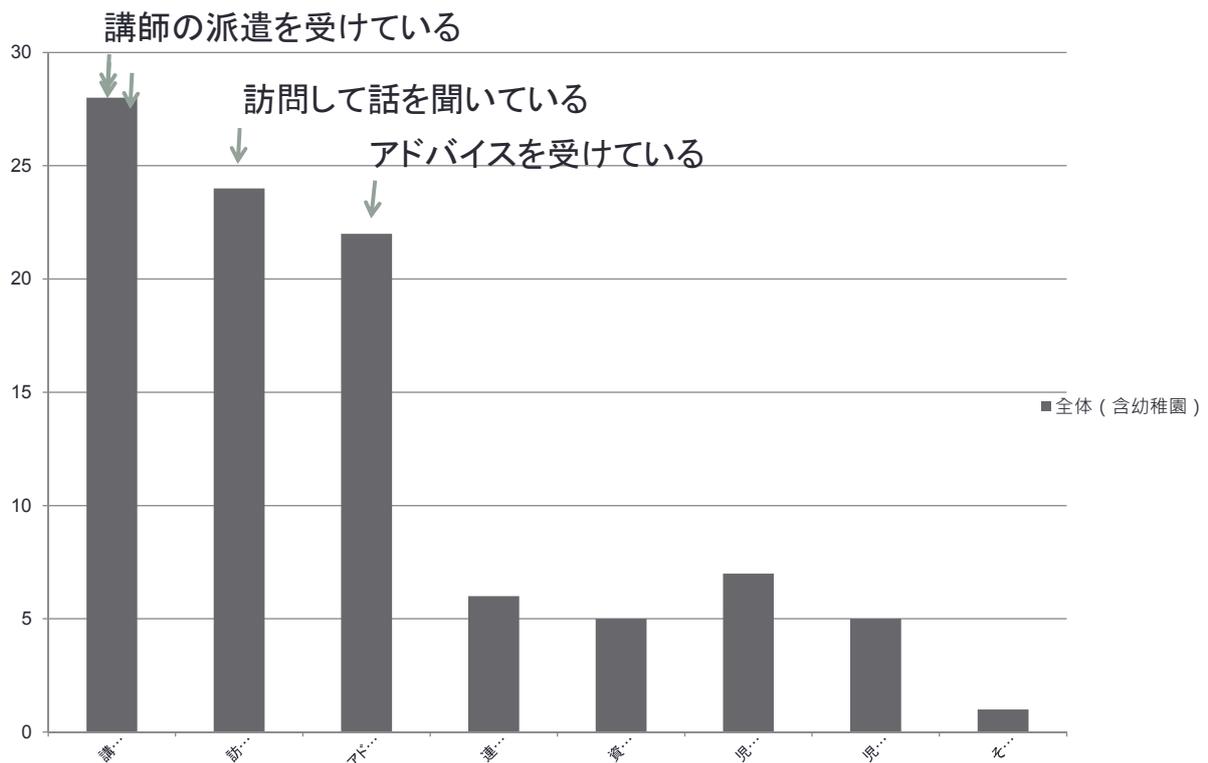
- 5. そう思う
- 4. どちらかと言えばそう思う
- 3. どちらでもない
- 2. どちらかと言えばそう思わない
- 1. そう思わない



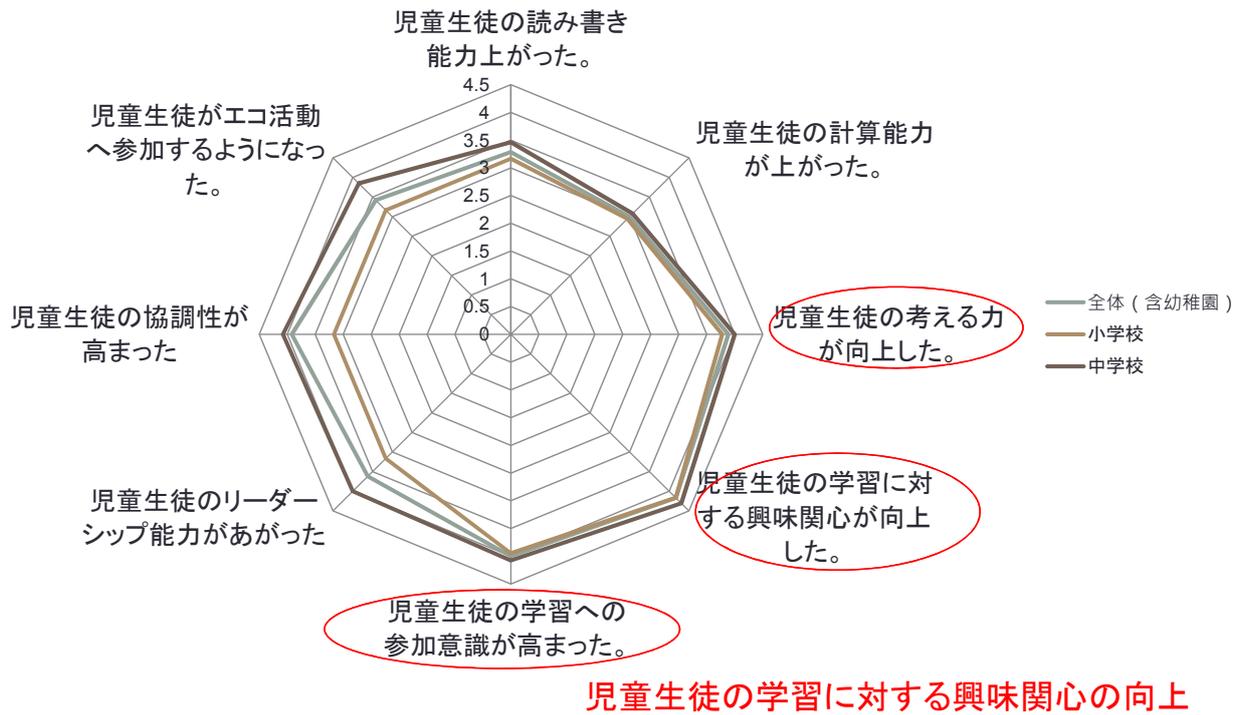
学校外部との連携する力の向上

ESD世界会議を前にサステナブルスクールと同じ調査項目で実施

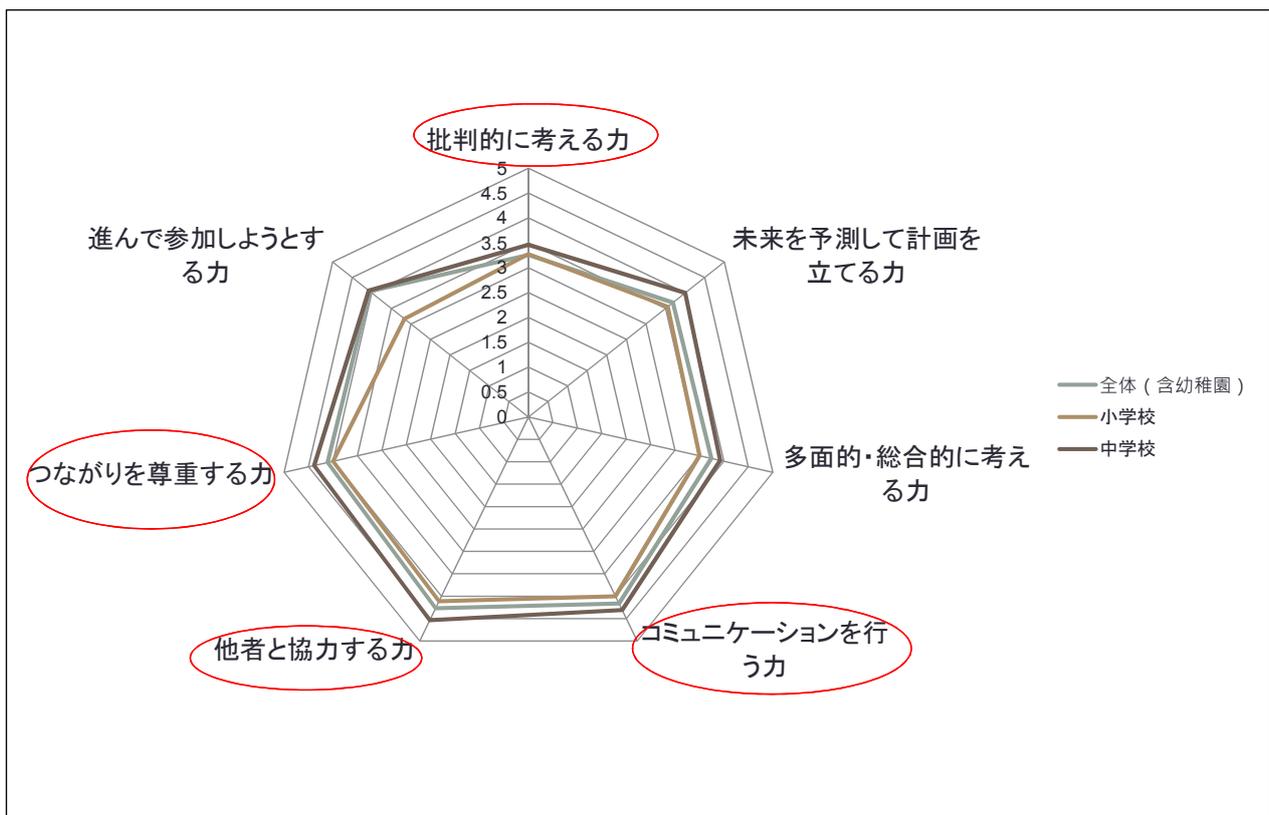
外部連携



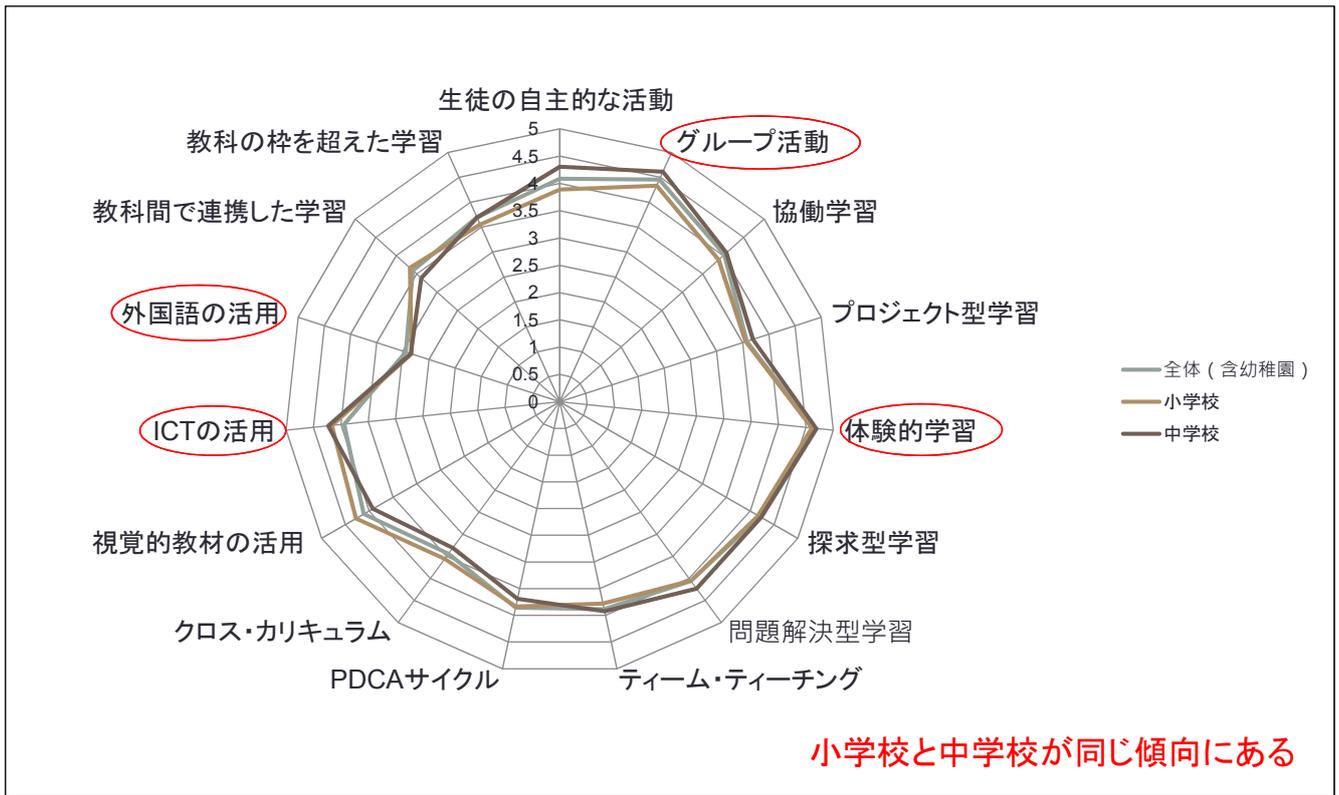
## 児童生徒の変容



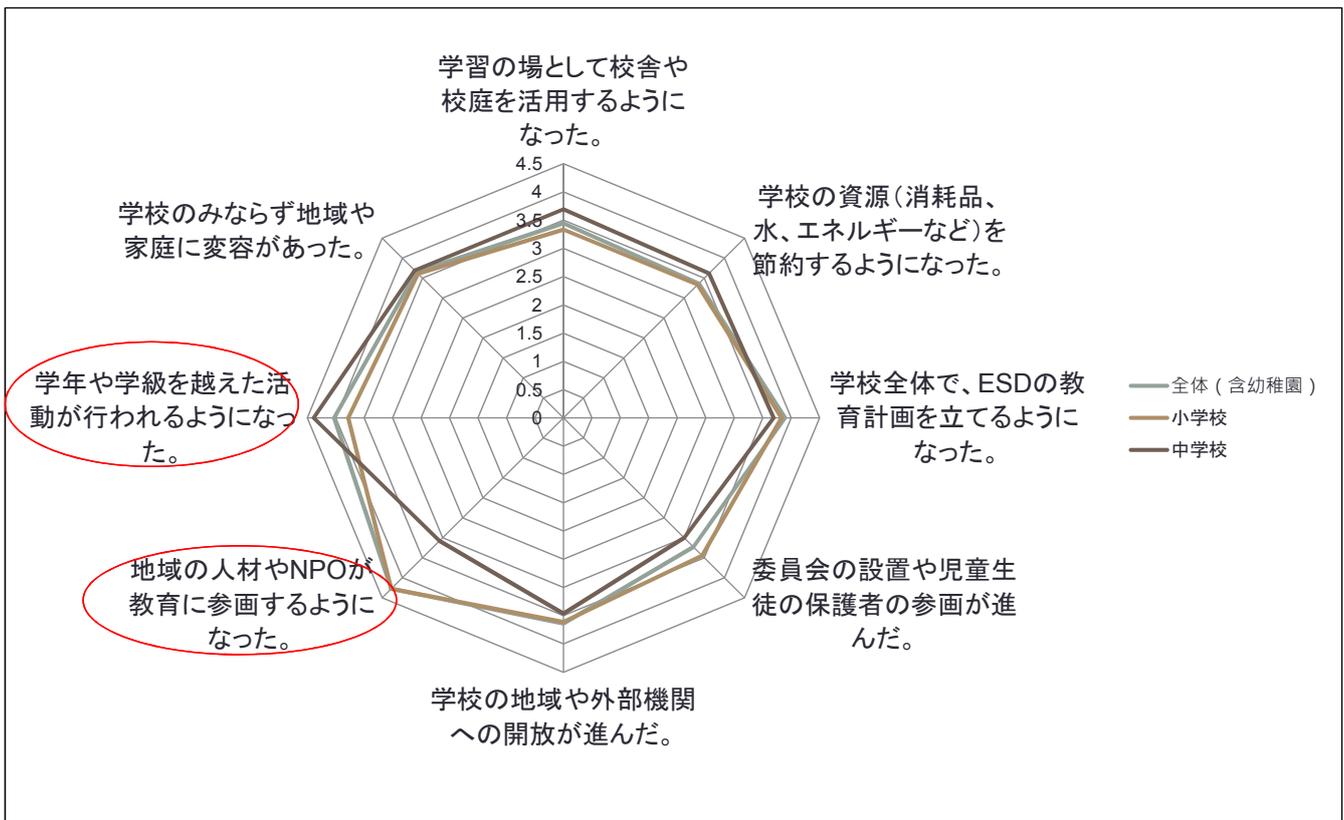
## ESDコンピテンシーの獲得



# 教育・学習方法の変容



# 学校の変革



支援：大学からの専門的知見・情報の提供



アジアの学校間交流プロジェクトのテーマ

## 「おこめRice」プロジェクト

お米をテーマに、自然環境、農業、食文化、お祭りなどの伝統芸能などをテレビ電話(インターネット)で交流する。

現在、宮城県内の学校と、タイや韓国の学校との間で交流がはじまっている。

両校の国際交流には、宮城教育大学をはじめ、全国17大学が、相手校の紹介、英語やICT技術をサポートしている。



## 海外との交流を促進し、活動の質を向上

「ハレ」(非日常)の授業よりも、「ケ」(日常)の授業の大切さ

ーイベント型からの脱皮ー

今後、我が国のユネスコスクールは、特に海外との交流を促進し、活動の質を向上するべきである。

交流事業を継続させるためには、

既にアジア共通の食材である「コメ」について行われているように、今後、気候変動、防災・減災といった学校間で共通テーマを明確に設けることが重要である。:フラッグシッププロジェクト

こうした交流事業を推進するためには、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク(ASP UnivNet)の支援や協力を得ながら、国内外のユネスコスクールとのネットワーク作り、地域の教育機関との連携等を図っていくことが重要である。

18

## 教師の指導力の向上に向けて

### • 学び続ける教師

大学カリキュラムへのESDの位置づけ

教員免許状更新講習

キー・コンピテンシーなどへの理解

ファシリテーターとしての能力(気仙沼市白幡教育長)



### • 地域の教育資源を活用した教育研究、教材開発 地(知)の拠点形成(COC)事業

### • 大学を中心としたESD教育の質向上の研究機能強化

国連大学、*The Higher Education for Sustainable*

*Development (HESD)* などの高等教育研究機関との連携強化

ESDに関する学会の創設による授業実践を含む研究の場の創設

19